



中村俊定文庫
文庫 18
737



静み思へもろ流るるに
かこつた飛くは能く
世の事ふ人去つて
後あき花の寸片は小舟と
可なりと里とて免れ
於るはあはれとてや
里はつる中

有能人の子を養ふ以て強くす
 多る見いしは強くす唯そ其の
 有地すを此以てある人の文に
 久しき事ありて其のつもの
 素よりけせし思ふ事あされある
 加へてあること思ふ事あはれも
 ありかきしは強くす
 加へ

才学第一の紫雲由強肖像



文化三丙寅年
 秋七月廿四日 卒

宇野橋画



歌仙

三翁を

由雅



今らるるハニ雲林に置るる落石方哉

深思のふぶ花加桶の花

由雅

月に霜小ゆとち流乃新流を

水簾

巻ひる乃ある豆厨あり

煮川

降中ハ僅に欠へく積り

釜魚

り終に多恵の甘

三

如綾

此の月如摺る

由雅

花子をも

山郷を中略也

近

松鶴

思ふに月を

三

初より如那の面を

生垣の身りがまやさなうけ 鼓吹

曰がまりに遊ふ 鶴 遊志

系はるからに縁録と味て 雀賀

濡をさう色しここの月の雨 文思

洗ひ髪結んご後にぬけし系 一皮

風平なわら歌一短の加羅 孤山

五毒あかす秋、猿す極るま 朱明

内々に隈あし峰に澄印月 如翁

水に寄し海三井と孤遠以鐘 益賀

張くところをたし憲法 汀片

紅更美のし四々を系が言 兎生

舞をもを系にかたう歌種 三省

舞を崖酔らしくあるる 足 三子彦

とや履美の田系の系飛 泰鯉

光の音もゆきしに石地蔵 永河

垢新、娘ともや八十 仙阿

郭之七物の橋と志願ふこ

恒海

意の通こく乃垣の如き

芝山

志願ふよ年あし以成し下る

加笑

神水利生も多移る如し

其務

昇進乃由以子あし四位上

秀笑

起るしは時あしこつ以ち

如光

定かし如業按し以し月形影

五明

大落をくろあし肩に膏薬

笑叟

笑くこもまき膏に物か心

萬義

あはし波ハ意江灘

亀勢

布張井の釣籠乃乾く以浦と海

時習

菜張菜子あしあし祢乃云

拙平

引つて糸代はく申く糸張る

一無

まき張るあし語をくさす

執筆

悼句 到未頃

極楽へ飛遊の愛や梅を也 一宗舎 三省

ありき松平の油をくさる籠籠 雀賀

多能無にあつ免る露乃液小 三彦彦

思ひきや虫乃音あゝゝ証の舞 足山

孫約に袂をぬゝけ回向かふ 萬義

露草の秋海棠也かたきり不 秀賀

一葉ちる風にもあゝゝ那る免 益賀

何んとも露や思ゝゝむ古の秋ハ 朱明

思ひきや福生ぬ乃月をくハ 仙阿

千春名ある事もゆゑや五時の
守り呼ばれし経受の所を秋悵

鉢植やかゝゝハ詠へて羽く出 孤山

空に孤名をかゝりゝゝさゝか夕ア月 如翁



世交の思ひも思ひぬる秋の思
 秋の落せハ小車の玉がたを
 秋のせにハ杖も打とけり
 菩提子也法杖の中にもあら
 蓮の葉や飛と西の位も去
 楓心と思ふ人去り志りけり
 涙みそとを思ハある笑はる哉
 五明

時よしの思ひをこころ

色かぬ松もとみ代に限るか
 紫乃そに好ある口浦をうか
 西海に置くとつ也や風はあ
 如光
 笑叟
 亀坊

情まもつ松ハ先とちりにけり
 泰鯉

とくはむつと源うー世経る人の
こころうらむとつとみ

起つこねに時志る桃乃とけり哉
 秋の落し方に呼吸と好けり
 恒海
 汀芦



世にありすすちみそいりいよ遊へり
由雅夫人の文月おそく免路より
いづらばやゆふしやまゝ、老のあ
らむもゆくりあるにふりぬるも
あまさらばゆふのそららけのつら
あやこりつらにつらうそくしも
せむき無あゝちんときさあさ
いふれはつらさむい月廿五日
つらふはつらむい終にちん人乃
物を入ぬやまらむいつらむ
菫をいれむらむ乃痛むにゆき
何くむとむつらむいぬるに秋の
月乃葉月とつらむ相の二葉の
凡に後とてあはむさあさの
若果一臨終正意にはまはあは
かすは福はらむ

彼國てえんや二十とあ夕

小簾

あ紀人乃るあをにまゆを
葉林に葉枝とハ七葉枝か
きそ七葉にあひまいろ
うき光とつら福らあ
かあゆゆのあむみらあ
枝ハま秋とあゝ想てあもあ
あ葉ハあ色紙あてまあ

文庫系人西武支那の間に
落るをけりて等成採

文化三年寅仲秋

岡島田製

